

本稿は第45回東北社会科教育研究協議会青森大会における記念講演の概要を、講演者の了解を得て帝国書院資料編集部の責任においてまとめたものです。その際、一部を『新地理学習の方向と展開』（濹澤文隆著、明治図書、2001年）を参考資料として、資料編集部で加筆修正しました。

1 新中学校社会科の方向—基礎・基本

新教育課程の実施に合わせるようにして、基礎学力の低下をめぐる議論がさかんになってきています。それも、基礎学力＝知識量といった構図での議論が多く、そのため内容の厳選、学校週5日制、総合的な学習の時間などへの風当たりがきびしく、まさに逆風が吹いています。

しかし、こうした時期だからこそもう一度冷静になって、基礎学力とは何かについて考えることが大切です。

■■■■■■■■ (中略) ■■■■■■■■

私たちが学習指導の対象にしている生徒はどんな社会に生きることになるのでしょうか。未来を予測することは困難ですが、少なくとも終身雇用制が崩れ、それにともなって学歴社会も崩れる中で、プロ野球の選手のような業績にもとづいて年俸を決め、契約していくような雇用制の社会になっていくでしょう。そうした雇用制度の下では、プロ野球の選手がそうであるように、学歴は二の次となり、実力が問われることになるでしょう。しかし、今日の学校教育は、学歴社会が存続することを前提に、受験を最優先し、受験にしか対応できないような学習指導に陥っています。これでよいのでしょうか。

かつて帝国主義の時代には大英帝国がヨーロッパでもひとときわ際立っていました。しかし、今はEUを構成する重要な1国であることはまちがいありませんが、かつてのような位置づけにはありません。同様に日本は20世紀の終わりごろにはアジアでひとときわ際立った国でしたが、地盤沈下しつつあります。そうした中で、かつて日本の御家

芸であった“安い割には品質がよい”という特色は完全に中国に奪われ、その面では中国が世界を席卷しています。日本がそうした特色の下で世界進出することは不可能といえるでしょう。これからの日本は、日本ならではの技術開発の下で高くても欲しくなったり需要があったりするようなものを開発し、勝負していくことになるでしょう。

また、社会の変化はこれからますますスピードアップしていくものと思われます。それは生涯学習の時代であることを意味しています。

今、今の生徒は、そうした社会に生きていかなければならないのです。だから“生きる力”の育成が大切な課題になっているのです。“生きる力”は理想でもなんでもなく、今の子どもたちにとってはきわめて現実的な学力なんです。

したがって、これからの中学校社会科は生きる力をキーワードにして基礎学力を検討し、生きる力をはぐくむことに結びつくように授業改善を進めて行く必要があります。変化する社会に関心をもち続け、変化する社会を自ら認識し、必要に応じて対応、参加していく上で必要な能力を身につけていく必要があります。学び方を学ぶ学習の充実が必要です。一方、社会は変化するので、細かな知識よりも、座標軸になるような知識をしっかり身につけることが大切です。知識は厳選してしっかり身につけさせ、学び方を学ぶ学習の充実に向けていくことが大切になってきているといえるでしょう。



2 新しい地理学習の方向

3分野の中でなぜ地理だけが大きく変わったのか、との質問が大きく聞かれます。まず、この点にお答えしたいと思います。

三分野にはそれぞれ特色があります。地理、歴史的分野は事実認識の学習が中心です。ですから、公民的分野に比べると、学習内容が具体的です。帰納法的なアプローチによって学習内容を構成しているからです。それに対して公民的分野は関係認識の学習が中心になっており、概念的知識を扱っていますから、話が抽象的になりやすいし、演繹的なアプローチによって学習内容が構成されています。

地理と歴史は事実認識の学習、帰納法的なアプローチという点では共通していますが、基本的な違いもみられます。地理は時間軸でみると現代が学習対象であり、空間軸では世界や日本の各地を対象にしています。それに対して、歴史は過去から現在までの時間軸を基に学習内容を構成しています。過去のことは、たとえ事実的知識であっても、特に生徒が身につけるような知識の場合は、よほどのことがないかぎり、変化し、役に立たなくなるようなことはありません。それに対して、地理の事実的知識は現代という変化の時代が学習対象であるだけに、大きく変化し、すぐに役に立たなくなってしまいます。

私が調査官の時代に、ソ連が崩壊しました。そのとき、たくさんの先生方から教科書に代わるものを出してほしい旨の要請がありました。というのは、次のような理由からでした。ソ連が崩壊し、ロシアは計画経済から市場経済に大きく方向転換する。そうなると、コンビナートとか、コルホーズ、ソフホーズなどについて、これまで通り教える意味がなくなる。しかし、教科書にはまだそうしたことが書いてあるし、教科書に書いてあることを教えないと入試が心配だから、今のままでは変化しもう教える必要がないであろうことを、教えざるを得ない。これを避けるためには、文部省が教科書に代わるものを緊急につくって配布するのが望ましい。要するにそういうことでした。

これでわかったことが二つあります。一つは、地理の授業は入試のためにやっているんだということです。もう一つは、地理の授業は変化したら教える必要がなくなるようなことを大事に教えているということです。これでは学びがいないのも無理ありませんし、変化に対応することができません。

地理は歴史と違って現代という変化の時代を扱っているからこそ、歴史のように事実的知識を詰め込む学習に止まっていたはならないのです。したがって、歴史とは違った学び方を工夫する必要があります。現代が変化の時代で、その現代を扱っているかぎり、地理は絶えず刷新、更新が必要

となりえます。したがって、地理は生涯学習に馴染むように学習指導を工夫していく必要があります。地理的分野だけが大きく変わったのは、そうした背景によっ



ています。

変化の時代は事実が刻々と変化するだけに、事実認識がいつそう必要となります。ただし、それは事実的知識を詰め込むことではありません。そんなことしたら、変化の時代であるだけに、覚える知識が膨大にふくれあがり、パンクしてしまいます。変化の時代は、知識を覚えるというよりも、事実認識の方法を身につけ、自ら必要に応じて事実認識ができるような能力を身につけることが大切なのです。地理が学び方を学ぶことを重視して改訂したのはそのためです。

3 地域の規模に応じた調査の扱い方

「地域の規模に応じた調査」の取り扱いに悩んでいるとの声が多く聞かれますので、次にこの点について考えることにしましょう。この項目の学習のゴールは、自分で必要に応じて都道府県や国々を調べ、特色を明らかにすることができるような能力を身につけることです。したがって、この項目の学習成果を問うテストでは、授業で取り上げていない都道府県や国々を対象に、その地域的特色を明らかにするような出題が望まれます。授業で取り上げていないのですから事実的知識を問う問題は出題できません。授業で身につけた学び方を使って解くような問題を工夫する必要があります。

では、地域的特色をとらえる視点と方法を身につけるようにするにはどんな工夫をしたらよいのでしょうか。

そのポイントは入口（導入部）と出口（終末部）にあると思います。入口では、自分たちが住んでいる県の特徴はどのようにすれば明らかになるか、この問いを發し、教科書を手掛かりに、どんな視点から追究すればよいかについて検討することがポイントです。これまでの実践をみると、多くがこの検討場面を設定していません。一通り概要を学習して関心を喚起し、各生徒に自分の関心に応じて課題をつくらせるか、あるいは自分の住んでいる県の場合は特にですが、いきなり調べ学習をやるから自分の関心に応じて課題をつくりなさいなどと指示するような展開が目立っています。これでは、地域の特徴をとらえる視点と方法を効果的に学ぶことはできないでしょう。

実は、そうした各生徒に調べたいことを調べさせる学習は、どうしても調べた結果をレポートしたり、新聞にしたり、発表し合うような学習でこの学習が終わる方向になります。つまり、ゴールが何がわかったかの発表の場になります。ゴールが調査結果の発表ということになると、必然的にわかったことを覚えるという、知識化が重要となってきます。こうした学習ならばこれまでも行ってきたのではないのでしょうか。


ゴールを、学び方を学ぶ学習にしたいのです。それには入口でその布石を打っておく必要があるのです。学び方にかかわる検討の場をぜひ工夫してください。

地域の特徴をとらえる視点の検討の場、これをぜひ設けてください。なお、この点では従前の学習指導要領の「日本の諸地域」の窓方式の窓が参考になるでしょう。都道府県レベルの地域でも、この窓は十分通用するでしょう。そして、窓、視点について検討したら、次にそうした視点から特徴を追究するためにはどんな資料を手がかりにして調べたらよいか、それはどのようにすれば入手できるかなどについて検討します。そして、調べ学習へと展開していきます。


その際、静態地誌的アプローチ、動態地誌的アプローチについて学習できるように、工夫していただきたいと思います。

■■■■■■■■ (中略) ■■■■■■■■

出口では、入口の学習を受けて、このように自分たちの住んでいる県の特徴が明らかになったの



県学習や国学習では、
地域の特徴をとらえる
視点、方法を身につけ
ることだよ



北海道だったら、
視点は？

うーん、広さと…
寒さと…アイヌ…

は、どんな視点からどんな方法で調べたからか、地域の特徴をとらえる視点や方法について、学習を振り返りながら整理することがポイントです。そして、ゴールを学び方を学ぶ学習の場にしていただきたい。そして、学び方が整理ができれば、ではそうした視点や方法でほかの都道府県を調べてみましょう、と提案する。これまでの実践をみると、このゴールの学習の場にも問題があります。学び方を学ぶ学習のゴールは、学び方を学ぶ学習の場にすることが鉄則です。

そうすれば数学科の例題と練習問題のような関係を工夫することができます。数学科のテスト問題では、教科書に掲載されている問題をそのまま出題するとひんしゅくを買います。これをモデルに、地域の規模に応じた調査も、自分たちの住んでいる県を例題に位置づけ、練習問題を生徒自身に取り組みさせることができるようにすることが望まれます。そのポイントは、入口と出口に学び方に関する学習の場を設けることです。

これからの地理学習は生涯学習を前提に、生きる力にかかわる能力を育成するよう工夫、努力する必要があります。そのためにも「地域の規模に応じた調査」の趣旨をしっかりと理解し、マスターしていただきたいと思います。